

## 地域活性化フォーラム in 道北

～「産学官金労言」の連携強化で地域社会を豊かに～

(報告概要版)

日時 2016年9月24日(土) 13:30～16:30

場所 道北経済センター「大・中ホール」

主催 連合北海道

共催 連合北海道上川地域協議会、旭川ウェルビーイング・コンソーシアム

後援 北海道上川総合振興局、旭川市、旭川商工会議所、北海道中小企業家同友会道北あさひかわ支部、旭川市教育委員会、北海道新聞旭川支社、あさひかわ新聞、(株)ライナーネットワーク、旭川信用金庫、北海道労働者福祉協議会上川ブロック労福協、北海道労働金庫旭川支店、全労済道北支店

プログラム

■基調講演① 演題『デザインとものづくりによる地域活性化』

講師 旭川家具工業協同組合代表理事 渡辺直行 氏

■基調講演② 演題『道北の未来に向けて我々ができること』

講師 旭川大学経済学部教授 江口尚文 氏

■パネルディスカッション テーマ ①若者 ②地域連携

コーディネーター 旭川ウェルビーイング・コンソーシアム 竹中英泰 氏

パネラー 旭川家具工業協同組合代表理事 渡辺直行 氏

旭川大学経済学部教授 江口尚文 氏

旭川市子育て支援部母子保健課長 阿保理恵子 氏

旭川まちづくりプランコンテスト実行委員長 浅沼大樹 氏

連合北海道上川地域協議会長 三村勉 氏

参加者 273人

※以下、発言内容については要旨としてまとめたものです。

### 主催者あいさつ

＜連合北海道 出村会長＞

○まずもって、北海道を襲った台風で被災された方々にお見舞い申し上げます。また、災害復旧活動に健闘いただいている皆さんに感謝する。

○いま産学官に加え、金労言、様々な団体が力を合わせて地域経済を豊かにしていくことが問われている。

○連合北海道では、労働条件、賃金格差の改善に取り組んできているが、4割が非正規労働者、子どもたちの6人に1人が貧困状態という深刻な社会状況にある。

○人口減少も顕著になり、北海道では2040年には400万人前半台、20～39歳の女性が半減以下になる自治体が8割を超えるというショッキングな推計が出されている。

○子どもを産みたくても産めない、正規を希望しても正規になれない労働者が多くいる。こうした実態を変えていかなければならない。

○いま必要なものは地域における持続可能で安定した雇用の場をつくっていくこと。そのため、地域の企業や様々な団体が元気になり、連携していかなければならない。

○本フォーラムを通じて課題解決へのヒントが得られたら幸いである。

## 来賓あいさつ

＜西川将人 旭川市長＞

○本日は旭川市で素晴らしいフォーラムを開催していただき、連合北海道、連合旭川地域協議会ははじめとする関係各位、また、道北地域からたくさんの皆さんがお集まりいただいたことに感謝申し上げます。

○人口減少など大変難しい課題に直面するなか、どのように地域の元気や活力を取り戻せるかということで、子育て支援、若者が活躍できるまちづくり、高齢者にも安心して暮らせるまちづくりなど多方面から対策が必要となっている。そのようななか、地域には素晴らしい資源がたくさんあり、どのように発掘して可能性を伸ばしていくのか、そして、その成果を次の世代にバトンタッチできるのかが課題となっている。

○フォーラムでの議論を活かして、それぞれの立場でご活躍いただきたい。

## 基調講演①

『デザインとものづくりによる地域活性化』

旭川家具工業協同組合代表理事 渡辺直行 氏

○リオ五輪において日本は男子100M×4リレーで銀メダルを獲得した。バトンタッチを磨いた結果。徹底的に強みを伸ばすのが必要。

○旭川の家具工業の強み

- ・旭川の家具組合は地元メーカーと東京のメーカーが混在しており、どこにもない形態で日本一だと自負している。

- ・技能五輪では多くの方がメダルを獲得、国際大会でも活躍しており、日本一の技能集団でもある。海外の有名家具とクオリティは変わらない。

- ・中川町のヤチダモなど家具製作に適した広葉樹が北海道には多く、全国の27%資源量がある。一昨年「この木の家具北海道プロジェクト」を展開。「この木」ということで地元の材料を使えるのは旭川・北海道しかない。

- ・1976年にはデザインシンポジウムを開催、90年からは旭川家具国際デザインフェ

アを3年に1回開催している。世界各国から800点の作品応募がある家具職人の登竜門。また、旭川市のデザイン行政予算は他と比較し高い（経産省調査）。日本一のデザインのまちと言える。

・旭川には旭川市工芸センター、道立林産試験場、道立北方建築総合研究所があり、研究施設が充実している。

・1350脚に及ぶ世界一の椅子コレクション(織田コレクション)がある。

○皮肉にも経済停滞しデフレの日本だからこそ、アメリカなど経済成長し、消費者物価が上がっている世界と価格競争力もある。日本一や世界一の強みを総動員して家具をつくり、世界一の市場をめざしたい。

## 基調講演②

『道北の未来に向けて我々ができること』—大学と企業の視点から—

旭川大学経済学部教授 江口尚文 氏

○統計からみると、旭川の第一次・第二次産業は低迷している。医療・福祉産業は伸びている。人口の減少を上回り働く場は減っている。雇用の源泉は近年、医療と福祉にあった。旭川の公共事業は1997-98のピークから半減しているが、公共事業費と建設業の事業者数・従業員数は相関関係にあり、旭川の建設業は公共事業に依存している。

○旭川の雇用は有効求人倍率が2015年で0.96となっており、良くなっていると言われているが、ミスマッチが起こっている。専門職が不足し、事務職の希望があふれている。また、いま公共事業を増やしても建設業の希望は少ない。地域でバランスの良い産業構造を創らないと雇用も満たされない。

○小売業の売り上げを商業統計でみると、人口1人あたり販売額などで旭川は札幌や函館の低迷と比較し良い方である。対道北1市8町や対北海道の販売力係数が旭川は高く、道北エリアの拠点都市で、経済活動分野で人が集まってきている。まちづくりもエリアで考えないといけない。

○旭川の人口は、10歳代後半は大学進学で、20歳代は就職で、近年は30歳代でも転職で流出し、いまや60歳代がメイン。リクルートの調査では北海道・地元に戻りたい人が6割と多いが、仕事がないから帰れない。働ける場がないと人口維持は難しい。

○我々大学の役割は、魅力ある教育を提供して地元に進学する人を増やすこと。そのなかで地域を元気にできる人材を育成しなければならない。大学と企業は地域間ネットワークをつくって、大学で育てた人材を雇ってもらい、また、学生に地元企業の魅力・情報を伝えることが必要。また、UターンIターンで東京など大都市から人を吸引するのが、人口減少に歯止めをかける一歩だと考える。

○企業も大学も必要なのはイノベーション・新結合である。経済発展はイノベーションがもたらす(J. シュンペーター)。イノベーションと拠点配置を軸として地域企業を分析し行動類型をまとめてみたが、地域発信型、外来集客型、市場拡大型の3つが増えると地域経済が

元気になる。(下図参照)



○当ゼミでは従来の大学教育である経営理論と経営実践をイノベーション・新結合させる教育に取り組んでいる。使える知識、生きた経営学を学ぶ過程で、行動力、思考力、対人関係力、リーダーシップなどの暗黙知を身に着けられ、地域に必要な人材が育つと考えている。

○ゼミでは商店街マップの作成や江口ラーメンの出店、ラーメンガイドブックの作成、行政の要請による旭川市労働基本調査などを実践しているが、そのことによって、暗黙知を得るとともに、学生が地域の魅力を知り、地域を好きになってもらい、それだけではなく、その自分たちが知った魅力・結果を発信していこうとしている。

○最近では、若者を地域に留めること、ミスマッチを解消するため、旭川大学が中心となり6年前から「あさひかわ合同企業説明会」を開催している。これも産学官金の新結合。また、先日、旭川ラーメンの良さを高校生にも伝えたくて、当ゼミとラーメン業界と高校と結びつき「旭川高校甲子園」を開催した。学生は地域を歩き回り、地域の良さを知ると地域に残りたい、地元企業に就職したいという気持ちになる。

○イノベーション・新結合とは今あるものと今あるものを結び付けて新しいものを生むこと。旭川と近隣地域、また、産学官がすれば新結合・イノベーションが起こる。だから連携は大切。めざすのは地域のイノベーションである。

## パネルディスカッション

### 【パネラーのイントロダクション】

<竹中氏>

○まずは、阿保さん、浅沼さん、三村さんの順番で話しをしていただき、その後、テーマに沿った議論をしていきたい。

<阿保氏>

○旭川市では、子どもの夢や希望を市民全体で支えていくまちづくりを進めるため、旭川子ども条例を制定している。特徴は、青年という位置づけで大学生などの若者の役割を明記したこと。保護者と過ごす時間や年齢の近い子ども同士が遊ぶ機会が減っているなか、年齢の近い大学生などが、子どもの夢や希望を応援するような積極的な関わりを持ってほしいと

いう意図がある。大学生などと一緒に小中学校へ命の大切さを伝える出前講座に行くと、子どもからは「カッコいい大学生になりたい」などとの感想が聞かれる。子ども子育て支援では、児童虐待など速やかに取り組まなければならないものと、将来を見据えた地域づくり・人材育成の仕組みづくりがあるが、後者も行政にとって重要な役割だ。

#### <浅沼氏>

○旭川大学に着任したときの旭川のまちの印象は、人はいるし、市街地は栄えているが、「暗いな」というものだった。教員として学生と触れ合うと、モチベーションの高い学生は少なかったが、よくよく聞くと何かをしたがっていることがわかった。また、若者と何かをしたいと思っているまちの人も多かった。そこで、若者と社会・社会人を結び付けながら、まちづくりを考えていきたいという思いで、「まちづくりプランコンテスト」を立ち上げた。また、コンテストという年一回のイベントだけでなく、「何かをしたいと思ったときにここにいけば実現できるかもしれない」という活動を継続させることで、「文化」にしたいと思い、フェイストゥフェイスのコミュニケーションを常に取れる場として「常盤ラボ」をつくった。

#### <三村氏>

○地域が元気になるためには、働くものが元気に必要となるということで、連合は「働くことを軸とする安心社会」をスローガンに幅広く運動している。非正規労働が4割を超え、安心できない働き方が増えているなかで、教育機会の拡充、雇用機会をつくる、両立支援、セーフティネットの再構築などを通じ、働きたい人の困難を取り除いて、働くことに結びつく5つの「安心の橋」をかけることを求めている。

#### 【テーマ 若者】

#### <竹中氏>

○大きくテーマを2つ、「若者」と「地域連携」ということで議論を進めたい。この20年、日本は停滞・低成長になっている。国家財政あるいは地方財政も赤字を抱え、行政サービスも昔のように全体を牽引する力はなくなっている。そのようななか、各団体、若い人、年配の人など様々な連携を求められている。そのような意味でこのキーワードを立てている。それではパネラーの皆さんからお話いただきたい。

#### <渡辺氏>

○旭川家具工業では、バブル崩壊を頂点に企業数も出荷額も減ったが、経営者の世代交代は着実に進んだ。これからの未来を背負う若い世代の経営者にいかに旭川家具をバトンタッチしていくかだが、その前に、希望が見えないとモチベーションが上がらない。講演でも触れたが、世界に目を向けると明るい未来もあるということを伝えていきたい。

#### <江口氏>

○旭川大学に着任したとき、学生も大人も「旭川は何もないまち」という声が多かった。地域の人は意外と地域の良さを知らないのではないかと思い、地域の良さを見つけ出すような活動やろうとして講演で紹介したラーメン出店などゼミ活動をはじめた。地域の良さを知れば、地域を好きになる。「地域にはこんな良いところがある」とみんなに言えるような

状況をつくれれば、地域は元気になる。学生には地域の魅力をもっと知って、地域を愛し、地域にとどまり、地域を元気にできる社会人になってほしい。ゼミの活動を通じて、今は、大手の店ではなく地域の店を利用する学生が増えて、「やっぱり地域の店が良いな」という声が出る。自分たちにも自信が出て、活動にやる気も出て、地域の魅力を自慢するようになる。これが基盤となってもっと地域が元気になれば良いし、若者に期待している。そのための大学における学習活動を推進したい。

#### <阿保氏>

○旭川は全国平均よりも初婚年齢が若く、離婚率が高い。結果、ひとり親が多い。出生数が減っているなか、人口妊娠中絶率も多め。こうした現状のなか、最近、妊婦さんも支援が必要な方が結構いる。妊娠をだれにも言えなくて出産間近で母子手帳を取りにくるような若年妊婦さん、せっかく出産したけれど自分では子育てができなくて我が子を手放さざるを得ないといった方が窓口に来る。こうなる前に何とかできないか、根本的などころから見つめ直すということで、子どもたちに関わるということを考えて、命の大切さを伝える出前講座を実施している。こうした取り組みの効果が出るには時間がかかるので、継続性を維持することと、実際にスタッフとして関わる大学生や保護者など、裾野を広げる工夫も必要だと考えている。

#### <浅沼氏>

○社会情勢が変化していて、昔は大学に人材教育は必要ないと言われ、企業が育てていくというのがバブル以前の発想だった。今の学生は日本の未来や社会に対して、おそらくポジティブなイメージは持っていない。社会に余裕がない。不況だと言われ育ってきて、親の年収よりも稼ぐことができないというのが現実。思考がネガティブな人たちが多く、ネットワークが狭い。友達と先生とバイト先ぐらい。また、対価に対してシビア。若者を受け入れる余裕がない社会と、社会に出て行く意味が見出せない若者とを繋ぎ合わせたい。そのポジションにいるのが教員だと考えている。一度やらせてみると面白がってやる学生が多い。面白がると対価がなくてもやる。食わず嫌いのものに、無理やり一回食べさせる、それでやる気に火をつけることができれば、彼らはどんどん外に出て行くし、それを受け入れる土壌が社会にあれば、新しいものが生まれる可能性がある。

○情報技術をはじめ技術が発達してくると、これからは消費する場所、住む場所、働く場所が同じでなくて良いという時代が来ると思う。技術の進歩とともに今まで見たことのない生活スタイルになるのではないか。今の若者が直面している、これからの新しい社会は正解がわからない。だから、チャレンジしなければならないし、その環境を整備するのが大事で、大学の役割だと考える。

#### <三村氏>

○学校現場の現状はサービス残業も多く「ブラック企業」。家庭環境から学校を休みがちな子どもがいたが、学校に通わせるようにするには多くの困難が伴い、子どもを救うための連携が必要。高校に行くこともできない子どももいる。子どもも民主党政権での高校授業料無償

化は良かったが、奨学金の問題を含め、この国の教育行政に向けるエネルギー、姿勢ははなはだ疑問。基礎自治体で何ができるのか、模索していきたい。

### 【テーマ 地域連携】

#### <渡辺氏>

○日本では中小企業数が99.7%という話だったが、ヨーロッパも99.7~99.8%、アフリカも然り、アメリカは99.9%まで中小・零細企業だと言われている。世界は企業数でいくと中小・零細企業でできていると言って過言ではない。そういう実態があるのなら世界に行ってみようということで、2013年から中小企業家同友会の仲間と海外研修している。そこで感じるのは、国の枠を超えた連携があるのではないかということ。実際、研修をきっかけにアメリカで商売をはじめた仲間もいる。どうしても旭川にいと、札幌、東京、日本の順番に考えるが、いきなり旭川からヨーロッパ、アメリカに行ってもいいのではないかと思う。もうひとつ、いつも感じるのは、「日本は捨てたものではない」ということ、日本の美意識や感性、ものづくりというのは世界の憧れ。世界を代表する建築家も日本に学んでいるし、デンマークのミュージアムに行くと「デンマークデザインは日本の文化に学ばなければ存在しなかった」ぐらいのことを言う。地域の枠、日本の枠を超えて世界と連携したら良いと考えている。

#### <江口氏>

○私のゼミの活動は地域連携による学習。ラーメンの本も旭川印刷製本工業協同組合が印刷費を用意して「ラーメンの本を出さないか」という地域貢献ということで学生たちに託してくれたもの。それに加え、ラーメン屋さんの協力がなければ本は出せないが、簡単に取材に応じてくれるわけではない。門前払いにあたりしたが、それにめげず、何回も出かけていって、仲良くなって、取材に応じてくれた。その連携の成果がこのラーメン本。地域と連携しながら学生が育っていく。地域ぐるみで学生たちを育てていっているのが良い方向に行っていると感じる。おしゃれで破れたジーパンで企業に行くと、「ちゃんとしたズボンをはいて来い」と指摘してくれ、「これじゃダメだ」と自然に学ぶなど、地元の事業主は現場の先生になってくれている。連携活動のなかで本当に使える知識を学んでいる。

#### <阿保氏>

○H24年にはじめた私の未来プロジェクト事業だが、最初は課内だけの取り組み。どんなに頑張っても限界があり、また、大学生にどのように一緒に参加してもらうか、ということで、旭川ウェルビーイング・コンソーシアムに委託した。その連携で、大学生の参加も増えてきたり、保護者が乳幼児を連れて地域の学校に出向いたり、卒業した学校に出向いたり、地域ぐるみの子育て支援を少しずつやっている。プロジェクトは子どもに命の大切さを教えるという目的だが、もうひとつ、社会の一員として育ててほしいということで、大学生が小学生の職業体験を企画してくれた。企業もとても協力的だった。連携が広がり、色々な効果があると実感。このようなことを繋げていくのが行政の役割だと思っている。今度は、協力してくれている学生が社会に出たときに1人で歩いていきけるような応援ができないか

考えたい。そういう専門の人たちとも連携したい。

<浅沼氏>

○人口減少は日本しか経験していない。情報技術も発展し、ポジティブにもネガティブにもだれも見ただことのない世界。何が課題でどう答えるか、だれも知らない。人それぞれの得意分野で連携するしかない。経済学におけるリカードの比較優位理論は賛否があるが、これは連携についても言える。お互い強いところを強め合い、結びつき合い、できることをそれぞれがやれば良いというのが、これからのまちづくりや活性化に必要ではないか。最初から狙いをつけるのではなく、お互い強いものを連携して、結果として、自然に大きな木になるということが良いのではないか。

<三村氏>

○地域活性化に向けては地元の雇用増加、若者の人材流出阻止が期するところ。当たり前だが賃上げや長時間労働という働き方の是正、女性が注目されているが、出産・子育てしても働けるような環境の整備、正規と非正規の格差改善が必要。

<江口氏>

○今どきの若者はダメだという声があるが、はまり込んだらしっかりやれる。若い世代を見捨てずに地域で育ててほしい。

<浅沼氏>

○江口先生が言うように、これが楽しいと思ったことには打ち込む学生たちばかり。そういう機会をどれだけ経験させてやれるかだと思う。若者は流出しても良いと思っているが、問題は戻ってくるかどうか。出身の十勝では帯広に戻ってきたいという30歳代の人結構いる。ずっと旭川にいるのではなく、外から旭川を見て、良さを感じて戻ってくるというようになれば良いと思う。人を呼び込む方法はたくさんあると思うが、それは連携から生まれてくると思う。

以 上